様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０３１５０

研究課題名（和文）中世後期から近世初期までの〈メディタチオ〉に関する国際協働による哲学史的総合研究

研究課題名（英文）International Joint Research Program on 'Meditatio' from the End of the Middle Ages to the Beginning of Modern Times: a Cross between Spirituality and Philosophy

研究代表者
谷川　多佳子（Tanigawa, Takako）

筑波大学・人文社会系（名誉教授）・名誉教授

研究者番号：３０１５５２０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,800,000円

研究成果の概要（和文）：国際協働による本研究は、14世紀後半からイグナティウス・デ・ロヨラ『霊操』の教皇公認（1548年）までと、それ以後から17世紀後半までという時代区分のもと、「省察」「黙想」「瞑想」といった日本語を宛てられる〈メディタチオ〉に関する哲学者と神学者の思索を体系的に分析することで、主に、「観想」などの近接概念から区別されるその特徴付けが『霊操』公認以前までにどのようになされたかを解明し、かつ、『霊操』公認以後、デカルト、マルブランシュ、ライプニッツなどの哲学者、アルノーといったポール＝ロワイヤル派、さらにはフランソワ・ド・サルといった聖職者によって、いかに受容、改変（批判）、活用されたかを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、一方で〈メディタチオ〉という概念を、他方でイグナティウス・デ・ロヨラという人物を蝶番にすることで、従来の人文学研究において接点を結ぶことの少なかった、哲学研究と神学研究（ディシプリン）、中世研究と近世研究（時代）、そして日本人研究者と外国人研究者（国籍）が、それぞれ協働して取り組んだ、日本における最初の体系的・総合的研究という意義を有し、基本的な一次資料の整理と公刊、入手の比較的容易な商業誌を含めた媒体への研究成果の公表、公開のセミナーや講演会の連続開催を通じて、14世紀から17世紀までのヨーロッパにおける霊性の生成と展開のメカニズムに関する一定の研究成果を社会に広く発信した。

研究成果の概要（英文）：This international joint research program concentrated on the thoughts of European philosophers and theologians concerning meditation and tried to answer two main questions. The first question was how mediation was characterized especially compared to other spiritual exercises like contemplation from the late 14th century to the papal permission of Ignatius of Loyola’s Spiritual Exercises in 1548. The second issue addressed was how this exercise was received, modified (criticized) and employed, since its publication to the late 17th century, by philosophers like Descartes, Malebranche and Leibniz, Port-Royalists like Arnauld, and churchmen like Francis de Sales.

研究分野：哲学史

キーワード：霊性　affectus（情愛、情感、情動性）　meditatio（瞑想、黙想、省察）　contemplatio（観想）　デカルト　ライプニッツ　フランソワ・ド・サル　アルノー

１．研究開始当初の背景

とりわけデカルトを中心とする西洋近世哲学史研究において、一般に「黙想」「瞑想」「省察」といった日本語を宛てられる〈メディタチオ（meditatio)〉という概念が考察される場合、イエズス会の創始者であるイグナティウス（イグナチオ）・デ・ロヨラの主著『霊操（Exercitia spiritualia)』が参照されるべき起点的かつ決定的な資料となる。イグナティウスが『霊操』において、それまでカトリック修道会に蓄積されてきた〈口祷〉〈念祷〉〈良心の究明〉〈黙想 / 瞑想〉〈観想（contemplatio)〉といった、主体の自己への働きかけのキリスト教的諸実践（霊性）を本格的に体系化したことは周知の通りである。イエズス会が運営する学校でこのイグナティウスの思索ならびにキリスト教的人文主義教育を授けられるも、その主著『省察（Meditationes)』で、便宜的にそう呼称するなら〈神学的なメディタチオ〉を〈哲学的なメディタチオ〉へと変形したと考えられるデカルトの思索の生成と展開を解明する専門的な影響作用史研究は、A. Thomson の論文 Ignace de Loyola et Descartes : l'influence des Exercices spirituels sur les œuvres philosophiques de Descartes（1972 年）を嚆矢とし、W. J. Stohrer、Z. Vendler、B. Rubidge といった英語圏の研究者によって、この主題に関する一次資料、問題点、両者の類似点と相違点について基本的な整理が行われてきた。その後、M. Hermans らによる共著論文 Ces Exercices spirituels que Descartes aurait pratiqués（1996 年）により、17 世紀初頭に『霊操』の解説書を執筆したイエズス会士フランソワ・ヴェロンが当該研究の対象に含められるなど、1990 年代には研究の拡大深化があった。しかし、2000 年以降は、デカルト研究を世界的なレベルで牽引する D. Kambouchner の研究書 Les Méditations métaphysiques de Descartes（2005 年）によって、当該主題の研究史が簡単に振り返られたのを除けば、専門的な研究成果は公表されていない。また、国内の西洋哲学史研究において、〈メディタチオ〉という概念を主題にしたイグナティウス-デカルトの影響作用史研究は、研究分担者の津崎良典氏による導入的研究である「デカルトにおける〈メディタチオ〉に関する予備的考察：イグナチオ・デ・ロヨラとフランソワ・ヴェロンとの関連において」（『筑波哲学』、査読無、第 22 号、2014 年、71 - 94 頁）を例外として未着手であった。

２．研究の目的

本研究は、上記した国外での研究動向を引き継いで、〈メディタチオ〉という概念に関する限りでのイグナティウス-デカルトの比較作業を具体的かつ体系的に展開する国内で最初の本格的な取り組みとなるべく、一方で、イグナティウスを筆頭に、16 世紀後半から 17 世紀前半にかけて活躍したイエズス会士とデカルトとの影響作用史を精緻に記述することで、研究内容の具体性を追求することを目指した。他方で、『霊操』に一つの結実を見る、中世哲学・神学以来の〈メディタチオ〉論の積み重ねを通時的に記述し、かつ、多少なりとも『霊操』の言説的影響下にあった、デカルトと同時代、あるいはデカルト以降の哲学者・神学者による霊的実践論の具体を共時的に比較することで、研究内容の体系性を追求することも目指した。ただし、17 世紀フランスの哲学者・神学者に関する共時的な比較作業は、すでに Ch. Belin による研究書 *La conversation intérieure. La méditation en France au XVIIe siècle*（2002 年）によって基本的な見取り図が提示されているため、イグナティウス以前の哲学者・神学者による〈メディタチオ〉に関する思索と実践の通時的研究のほうを重点課題とした。

３．研究の方法

総論として、14 世紀後半から 17 世紀後半までの哲学と神学は、〈メディタチオ〉を中心としつつも、上述した〈良心の究明〉〈観想〉〈口祷〉〈念祷〉の他に、何を主体の自己への働きかけとして見なしてきたのか、それらはどのように定義され、それらの間にはいかなる関係性が打ち立てられ、何が問題点とされてきたのか、という問いから出発して、〈メディタチオ〉をめぐる概念史的・問題論的な俯瞰図を作成・提示し、かつ、この俯瞰図のうちに、どの哲学者・神学者のどの著作が位置づけられるかを、〈資料の整理〉と〈解釈の提示〉という二段構えの解釈学的研究手法を採用しつつ、国際共同研究の体制を敷いて考察した。

具体的には、以下の通りであった。〈メディタチオ〉という概念とその近接概念として同定・解明されたところに関する一覧表を作成する。個々の概念について辞書的な定義をすると同時に、それを支持する一次資料を列挙する。また、それら諸概念の相互関係を位置確定する（たとえば、〈メディタチオ〉と〈観想〉の区別は、少なくとも 12 世紀の修道士サン・ヴィクトルのリカルドゥスにまで遡れるが、この区別はどこまで維持できるか)。さらに、〈メディタチオ〉という概念をめぐって何が問題とされてきたか（たとえば、現在と永遠という時間性の問題、意志・注意・想像・記憶といった精神の諸機能など)、その問題群の一覧表をつくる。そして、〈メディタチオ〉をめぐる一次資料の文献一覧表をそれと結合させる。

以上の〈資料〉に、下記する各論①から③を通じて個々の哲学者・神学者について提示された〈解釈〉を付け加える。なお、国内外の関連分野の研究者には、随時、意見を求めるために、

国際共同セミナーや講演会を企画し、研究計画に還元させる。各論①として、中世盛期の修道霊性パラダイムから脱した〈新しき信心（Devotio moderna）〉運動の先導者ヘールト・フローテ、ならびに『キリストに倣いて』の著者トマス・ア・ケンピスを出発点として、14 世紀後半以降の霊的実践論の具体を通時的に記述することで、イエズス会的な霊性パラダイムの成立背景を解明する。各論②として、16 世紀後半から 17 世紀前半における霊的実践論を主題に、一方でイグナティウス-デカルトの比較作業において未検討と思われる課題を発掘・分析し、他方でヴェロン以外のイエズス会士とデカルトとの影響関係を同定・分析する。各論③として、17 世紀後半における霊的実践論を主題に、⑴イグナティウスの批判的受容の神学路線として、イエズス会と対抗関係にあったポール・ロワイヤル派（サン・シラン、アルノー、パスカル）、⑵その哲学路線として、デカルト的な〈メディタチオ〉を意識して『キリスト教的省察』を執筆したマルブランシュ、さらに、デカルト的な〈メディタチオ〉から影響をうけつつも独自の霊的実践論を展開したスピノザ（cf.『知性改善論』）とライプニッツ（cf.「認識、真理、観念に関する考察」（1684 年）など）をそれぞれ取り上げ、主体の自己への働きかけがどのように論じられているかを共時的な視点から解明する。

４．研究成果

17 世紀と 18 世紀に編纂された主要なフランス語辞書によれば、〈メディタチオ〉という言葉には三つの主要な意味がある。第一は、一般的かつ日常的なもので、それ以外の二つは、個別的かつ専門的なものであり、それぞれ宗教用語と哲学用語に相当する。第一の意味は、精神が自分に対して考察対象を現前させ、かつ、この対象の考察に精励恪勤することである。この点で〈メディタチオ〉は〈観想〉から区別される。前者には精神の注意深さが要求されるが、後者の場合、精神は夢幻状態におかれたり、無作為に或る思考から別の思考へと移動したりするからである。また〈メディタチオ〉は、他のさまざまな精神作用から三つの特徴によって区別されることも判明した。第一に、それは精神の一貫して持続する注意作用を前提にするため、一時的ではなく継続的である。第二に、それは或る一つの考察だけからなるのではなく、幾つかの考察からなる。つまり、考察対象に幾度となく立ち返り、また、様々な観点から検討するということである。第三に、〈メディタチオ〉に取り組む精神は、その考察対象と特別な関係を取り結ぶ。つまり、対象を漠然と考察するのではなく、その前に立ち止まり、その内に分け入り、そして深く掘り下げるということがなされる。

それに対して特殊な意味における〈メディタチオ〉は、上記したように、イグナティウスの『霊操』にそれまでの体系化の一つの帰結が見出される宗教的（キリスト教的）修練つまり霊性を指す。これと一般的かつ日常的な意味におけるそれは、その対象（神、秘義、有限かつ堕落という人間の状態）、目的（人間の救済）、形式（修道制によって規定された修練）の観点から区別される。宗教的な〈メディタチオ〉は以上の特徴のために、祈祷という形式に帰着する。さらにそれが純粋な幻視である〈観想〉から区別されるのは、前者が推論に基づいて、つまり、順序と段階を踏まえて進められる限りにおいてである。〈メディタチオ〉とは、前提から始めて結論に行き着くこと、真理から真理へ、命題から命題へ前進していくことなのである。理性の使用という途を通る、方法的な進展が〈メディタチオ〉であるとすれば、〈観想〉にこのような途は存在しない。なぜならそれは、神のうちに諸事物を直接的かつ無媒介的に認識することだからである。したがって〈メディタチオ〉は、宗教的実践のなかでも必要不可欠だが、下等な形式にとどまるものとして見なされることが判明した。

近世初頭においてこのように定義されることになる〈メディタチオ〉について、本研究課題の射程とも一部重なる 11 世紀から 15 世紀にかけて概念的な精錬を担った聖職者たちの主要な一次資料は、カンタベリーのアンセルムス、擬ベルナルドゥス、擬アウグスティヌス、サン＝ティエリのギヨーム、カルトゥジア会のグイゴ二世、サン＝ヴィクトルのフーゴー、クレルヴォーのベルナルドゥス、サン＝ヴィクトルのリカルドゥス、トマス・アクィナス、ボナヴェントゥラ、ハインリヒ・ゾイゼ、ジャン・ジェルソン、カルトゥジア会のドゥニ、トマス・ア・ケンピス、そしてヨハネス・マウブルヌスの著作であることが判明し、重要箇所の同定ならびに分析を開始したが、研究期間内に十分な成果をあげるまでには至らなかった。しかし、研究当初に立てた問いである「〈メディタチオ〉という概念をめぐって何が問題とされてきたか」について、研究開始時には気づかれていなかった、中世後期における〈アフェクトゥス（affectus）〉の諸問題の重要性が強く自覚されるようになり、この方面に明るいフランス人研究者と共同研究を行い、その成果を複数の論文にまとめて公表した。

上記したことと関連して、中世から近世にかけて生じた霊性の変遷に決定的な役割を演じたイエズス会に関しては、⑴2017 年の宗教改革 500 周年を記念するキリスト教超党派の動きに呼応するかたちで、キリスト教諸派との和解にとどまらず、広く和解をめぐるイグナティウスの霊性のもつ射程を確認し、その具体的な試みとして、イエズス会三十六総会（2016 年）で取り決められた現代イエズス会の動きを俯瞰する論文を公表、⑵〈ミゼリコルディア（misericordia）〉という概念の意味を、聖書、トマス・アクィナス、教皇文書などと比較しながら解明、⑶「他者のための人」という現代イエズス会の教育精神の歴史的文脈の解明とイグナティウス的リーダーシップ（IL）の検討、⑷高山右近と霊操の精神との関連を解明することで、初期イエズス

会員後の世代の霊操の受容を研究した。また、一次資料の整備ということで、⑴ローマのイエズス会文書館で調査を行い、イグナティウス的-イエズス会的な源泉資料のデジタル化の可能性を探求、⑵『霊操』の新訳の完成ならびにピアレビューの開始、関連する解説の執筆を行った。

さて、一般的な意味の〈メディタチオ〉から第二に派生してくるのは、デカルトに代表されるような哲学的修練である。〈メディタチオ〉が哲学的といわれるのは、その対象が形而上学に関連するからであり、形式的な観点からいえば、これを一般的な意味における〈メディタチオ〉から区別するものは何もない。しかし哲学的な〈メディタチオ〉は、精神の注意深い行為だけを指すのではもはやなく、その足跡が書き留められ公にされた時の結果（例えばデカルトの主著『省察』）も意味している。つまり、私的で孤独なもの、（神以外の）証人を欠いたものではもはやなく、公的なもの、共有可能なもの、そして誰か他の人によって再現可能なもの（例えばデカルトの読者はその〈メディタチオ〉を自分のこととして実践できる）となったことが判明した。以上のことは、デカルト的な〈メディタチオ〉の受容に関する基本的な方向性をマルブランシュとライプニッツについて把握するためにフランス人研究者と行った国際共同研究の成果である。その成果のもう一つの柱は、研究開始時には気づかれていなかったライプニッツの「省察の使用について」という小論（1676 年）の存在である。その重要性に鑑み、これを邦訳し、解説を付して、公刊した。また、デカルトの『省察』執筆時の状況を克明に伝える 1641 から翌年にかけての、未邦訳であった全書簡を邦訳し、解説を付して、公刊した。

17 世紀は、このような哲学的な〈メディタチオ〉の普及と同時に、大衆的な霊的実践としての〈メディタチオ〉（黙想 / 瞑想）が普及するようにもなった。その背景となった、トレント公会議後の信徒教化の柱である聖体と改悛の秘跡との関連から、この大衆化とその弊害について分析し、かつ、このような〈メディタチオ〉の批判が、ポール・ロワイヤルの最初のマニフェストであるアルノー著『頻繁な聖体拝領』のうち、第二部第十二章において登場する生成過程を解明することで、ポール・ロワイヤル派における〈メディタチオ〉論の特徴を解明する研究の端緒を開いた。とりわけ本著作の執筆開始前に著者が体験した回心について、ソルボンヌ時代の空白期間の謎を解明し、より正確な伝記的理解の提示が可能となった。と同時に、『頻繁』は当初、第二部の一部のみで完結予定だったが、当時の論争に触発されたかなり大きな方向転換が二度生じたことに気づかれ、生成に関する基礎研究なしに本章ならびに本書の意義は理解できないことが判明した。その大きな鍵を獄中のサン・シラン書簡写本の日付再考に求めることにより、ヴァンセンヌ城に関する文献・実地調査へと導かれ、サン・シランの実際の牢獄生活とポール・ロワイヤルの伝記との間に大きな乖離があること、その背景に『頻繁』をめぐる論争があったことを発見した。

さらに、上記した霊的実践の大衆化のメカニズムを精緻に解明するべく、当初の研究対象には入っていなかった、『信心生活入門』（1608 年）ならびに『神愛論』（1616 年）で知られるフランソワ・ド・サルの霊性論の特徴を、フランス人研究者と協力しながら分析した。神秘主義の歴史におけるサルの独自性のほか、非知が知より優位といった現代思想でも重要なテーマ群（たとえばバタイユやヴェイユ）との関連、トマス・アクィナスやアウグティヌスなどの先哲受容の独自性、デカルト、パスカル、アルノー（とりわけ『頻繁な聖体拝領』の瞑想に関連する章のなかにサルの影響を見出すことができた）などの同時代人との相違点などを解明した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 18 件）

① 桑原直巳、「神の世界内在と恩恵：トマス・アクィナス恩恵論の全体像」、『哲学・思想論集』、査読有、第 44 号、2019 年、1-17 頁
② 桑原直巳、「イエズス会人文主義教育と女子教育修道会：聖心会を中心に」、『倫理学』、査読無、2019 年、第 35 号、1-21 頁
③ ジロー（望月ゆか・津崎良典訳）、「中世ヨーロッパの霊性史における情動性」、『思想』、査読有、第 1142 号、2019 年、44-63 頁
④ ジロー（望月ゆか・津崎良典訳）、「西洋中世から近世までのキリスト教的瞑想：信心 devotio と観想 contemplatio のはざまで」、『哲学・思想論集』、査読有、第 44 号、2019 年、51-76 頁
⑤ 桑原直巳、「第二バチカン公会議とイエズス会：正義の問題を中心に」、『哲学・思想論集』、査読有、第 43 号、2018 年、1-21 頁
⑥ 桑原直巳、「適応主義の源泉としてのイエズス会修辞学教育」、『倫理学』、査読無、第 34 号、2018 年、1-21 頁
⑦ ペーターズ（津崎良典ほか訳）、「トマス・アクィナス『真理について』の或る読解のために」、『哲学・思想論集』、査読有、第 43 号、2018 年、55-76 頁
⑧ ミション（望月ゆか・津崎良典訳）、「祈り、行動から「生の法悦」へ：フランソワ・ド・サルによる一般信徒のための新しい霊性」、『思想』、査読有、第 1126 号、2018 年、82-104 頁
⑨ 谷川多佳子、「デカルトと医学：精神（mind）、心身の二元論、メランコリー」、『日仏医学』、査読有、第 38 号、2017 年、7-18 頁

⑩ 桑原直巳、「「婚姻神秘主義」と「本質神秘主義」：中世後期から近代初頭にかけての神秘主義の展開」、『哲学・思想論集』、査読有、第 42 号、2017 年、1-18 頁
⑪ Yuka Mochizuki, "Le jeune Arnauld à la Sorbonne", Chroniques de Port-Royal, 査読有, 2017, pp. 307-320
⑫ 津崎良典、「デカルトによる精神の修練と高邁の徳について」、『理想』、査読有、第 699 号、2017 年、127-138 頁
⑬ ミション（望月ゆかほか訳）、「空しさ：聖書とその文学的変奏」、『思想』、査読有、第 1122 号、2017 年、129-151 頁
⑭ 桑原直巳、「霊操と隠修士」、『カトリック神学会誌』、査読有、第 427 号、2016 年、173-192 頁
⑮ 川中仁、「高山右近と霊操：高山右近とイグナチオ・デ・ロヨラの霊操の精神」、『ユスト高山右近帰天 400 周年記念シンポジウム講演集』、査読無、2016 年、14-22 頁
⑯ Yoshinori Tsuzaki, "La meditatio et la formation du jugement", Journal of International Philosophy Extra Issue 8, 査読有, 2016, pp. 9-26
⑰ パガニーニ（津崎良典訳）、「デカルトと懐疑主義：古代人か近代人か？」、『思想』、査読有、第 1106 号、2016 年、82-103 頁
⑱ ラトー（津崎良典訳）、「近世ヨーロッパにおける省察という修練：宗教的な修練から、デカルト、マルブランシュ、ライプニッツにおける哲学的な修練へ」、『哲学・思想論集』、査読有、第 41 号、2016 年、107-125 頁

〔学会発表〕（計 20 件）
① 桑原直巳、「倫理学における「共同体論」」、オリエンス・セミナー第 103 回、2019 年
② 望月ゆか、「アルノー『頻繁な聖体拝領』（1643）の生成過程再考に向けて：オルシバル仮説と 1645 年の証言」、パスカル研究会第 165 回例会、2019 年
③ 桑原直巳、「東方キリスト教の伝統とトマス・アクィナスにおけるキリスト論」、第 18 回東方キリスト教学会大会、2018 年
④ 桑原直巳、「世界肯定の神学としてのトマス・アクィナス恩恵論」、日本カトリック神学会第 30 回学術大会、2018 年
⑤ 桑原直巳、「「道徳」を内包する「宗教」」、第 1 回聖心女子大学宗教科教育研究会、2018 年
⑥ Yuka Mochizuki, "Repenser la genèse de *La Fréquente Communion* : apports et révélations d'un reclassement de la correspondance de Saint-Cyran", Conférence dans le cadre de leur programme mutualisé, Constance Cagnat et Laurence Plazenet, 2018
⑦ 川中仁、「「他者のための人」：現代イエズス会の教育精神」、第 65 回上智大学夏期神学講習会、2018 年
⑧ 川中仁、「「ミッション」としての神学の営み：使徒憲章「真理の喜び（Veritatis Gaudium）」がカトリック神学に問いかけるもの」、第 30 回日本カトリック神学会学術大会、2018 年
⑨ 桑原直巳、「トマス・アクィナス倫理学の現代的意味」、西日本哲学会、2017 年
⑩ Naoki Kuwabara, "The Jesuits and Japanese Buddhism in the Sixteenth and Seventeenth Centuries", The Third Annual Conference of the European Network of Japanese Philosophy, 2017
⑪ 桑原直巳、「現代社会とイエズス会：第二バチカン公会議とその前後」、日本カトリック神学会第 29 回学術大会、2017 年
⑫ 川中仁、「イグナチオ・デ・ロヨラ」、宗教改革 500 周年記念「ルターとイグナチオ：同世代を生きた二人の改革者」、2017 年
⑬ Takako Tanigawa, "Descartes et la subjectivité japonaise", The Second Annual Conference of the European Network of Japanese Philosophy, 2016
⑭ 桑原直巳、「「婚姻神秘主義」と「本質神秘主義」について」、日本カトリック神学会第 28 回学術大会、2016 年
⑮ Yoshinori Tsuzaki, "Taïken, kéïken et exercice selon Arimasa Mori, lecteur de Descartes", The Second Annual Conference of the European Network of Japanese Philosophy, 2016
⑯ 谷川多佳子、「デカルトと医学：心身、魂、メランコリー」、日仏医学会、2015 年
⑰ 桑原直巳、「『霊操』成立前史に関する一考察：ルドルフ・フォン・ザクセンの『イエス・キリストの生涯』を中心に」、日本カトリック神学会第 27 回学術大会、2015 年
⑱ 桑原直巳、「アリストテレス・トマス・ゴメス：anima 論の系譜」、哲学会第 54 回研究発表会、2015 年
⑲ 川中仁、「高山右近と霊操：高山右近とイグナチオ・デ・ロヨラの霊操の精神」、ユスト高山右近帰天 400 周年記念シンポジウム、2015 年
⑳ Yoshinori Tsuzaki, "La meditatio et la formation du jugement", Descartes : la morale de la *métaphysique*, 2015

〔図書〕（計 19 件）
① 川中仁、日本キリスト教団出版局、『「若者」と歩む教会の希望』、2019 年、202 頁（27-48 頁）

② 津崎良典、ミネルヴァ書房、『よくわかる哲学・思想』、2019 年、232 頁（32-39 頁）
③ ライプニッツ（谷川多佳子ほか訳）、岩波書店、『モナドロジー他二篇』、2019 年、256 頁
④ ネグリ（津崎良典ほか訳）、青土社、『デカルト・ポリティコ』、2019 年、400 頁
⑤ 谷川多佳子、岩波書店、『知の古典は誘惑する』、2018 年、175 頁（153-175 頁）
⑥ 谷川多佳子、水声社、『テクストとイメージ』、2018 年、263 頁（173-188 頁）
⑦ 川中仁、日本キリスト教団出版局、『和解と交わりをめざして』、2018 年、189 頁（58-74 頁）
⑧ Yoshinori Tsuzaki, Bardi Edizioni, Curiosity and the Passions of Knowledge from Montaigne to Hobbes, 2018, 400p. (pp. 203-222)
⑨ 津崎良典、扶桑社、『デカルトの憂鬱』、2018 年、373 頁
⑩ ドヴィレール（津崎良典訳）、白水社、『デカルト』、2018 年、220 頁
⑪ ライプニッツ（津崎良典ほか訳）、工作舎、『ライプニッツ著作集』第二期第三巻、2018 年、528 頁
⑫ Takako Tanigawa, Classiques Garnier, *Fortune de la philosophie cartésienne au Japon*, 2017, 195p. (pp. 67-76)
⑬ 桑原直巳、知泉書館、『キリシタン時代とイエズス会教育』、2017 年、196 頁
⑭ 川中仁、日本キリスト教団出版局、『神のいつくしみ』、2017 年、162 頁（37-58 頁）
⑮ Yoshinori Tsuzaki, Classiques Garnier, *Fortune de la philosophie cartésienne au Japon*, 2017, 195p. (pp. 177-180)
⑯ 川中仁、リトン、『ルターにおける聖書と神学』、2016 年、156 頁（91-119 頁）
⑰ ライプニッツ（津崎良典ほか訳）、工作舎、『ライプニッツ著作集』第二期第二巻、2016 年、451 頁
⑱ デカルト（津崎良典ほか訳）、知泉書館、『デカルト全書簡集』第四巻、2016 年、407 頁
⑲ ベラヴァル（谷川多佳子ほか訳）、法政大学出版局、『ライプニッツのデカルト批判』下巻、2015 年、640 頁

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：桑原　直巳
ローマ字氏名：KUWABARA, Naoki
所属研究機関名：筑波大学
部局名：人文社会系
職名：教授
研究者番号（8 桁）：２０１７８１５６

研究分担者氏名：望月　ゆか
ローマ字氏名：MOCHIZUKI, Yuka
所属研究機関名：武蔵大学
部局名：人文学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：３０３５０２２６

研究分担者氏名：川中　仁
ローマ字氏名：KAWANAKA, Hitoshi
所属研究機関名：上智大学
部局名：神学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：６０４０７３４３

研究分担者氏名：津崎　良典
ローマ字氏名：TSUZAKI, Yoshinori
所属研究機関名：筑波大学
部局名：人文社会系
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：１０６２４６６１

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。